

第5回懇話会における主な意見について

NO	項目名	ページ	委員意見（構想案に対する意見）	中間案における記載内容
	全 体			<ul style="list-style-type: none"> 概要版に整理した内容を「各項目のポイント」として各章の項目の最初に挿入しました。 他県の基本構想等を参考に、文末を「です・ます調」に統一しました。
	構 成	目次	<ul style="list-style-type: none"> 第1章から第4章までの筋立てを見直し、継承すべきところと現状に照らし合わせたものとをどうコミットしていくのか明確にしておく方が良い。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体の構成を見直し、「はじめに」と「おわりに」を加筆しました。 第1章の4現状と課題について、「(9)美術表現の拡大への対応」を加筆しました。 第4章の構成を見直し、「リニューアルの手法及び整備スケジュール」から「本構想の実現に向けて」と修正し、項立ても2項目から4項目に修正しました。 項立ての文言について、「リニューアル」を「施設整備」に、「運営方式」を「事業手法等」に修正し、「スタッフの充実」と「本構想策定後のプロセス」を加えました。
1	「はじめに」	P1-2	<ul style="list-style-type: none"> 構想の最初が「宮城県美術館の歩み」ではなく、今の美術館の置かれている状況とその中で宮城県が果たせる事、果たさなければいけないことなどを明らかにした方が良い。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後の美術館の果たすべき役割について総括的に記載しました。
		P2	<ul style="list-style-type: none"> 35年前の「開かれた総合美術センター」という言葉の意味と、35年経った今の「開かれた総合美術センター」という意味は全く違う意味である。県民に対して開かれていたいという思いは普遍的なものだが、どういうアート活動によって開かれていくべきなのかという点が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 「開かれた総合美術センター」の再構築に向けて、美術の多様性の体感、次世代を担う子どものプログラム、サードプレイスとしての美術館など、具体的な活動の取組例を挙げて記載しました。
2	第1章 リニューアルの背景 2 宮城県美術館を巡る状況 (2)文化芸術を取り巻く社会状況の変化	P7	<ul style="list-style-type: none"> アートを取り巻く環境が劇的に変化している中で、宮城県美術館がどう位置付けられていくのか明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 年代を区切って、美術表現や手法、美術のテーマの変化について記載しました。
3	4 現状と課題 (9)美術表現の拡大への対応	P16		<ul style="list-style-type: none"> 多様化している美術表現手法に対応する方向性を示しました。

4	2 宮城県美術館を巡る状況 (2)文化芸術を取り巻く社会状況の変化	P 7-8	<ul style="list-style-type: none"> 被災地の重要な拠点であり、アートが心の中で位置付けられたり、限界を感じたり、そこから可能性を見いだしたりするものがあるはずなので、そこに触れるべき。 被災した県として、津波なり地震なりを取り上げることで、大きな意味で歴史が持っていたものが宮城県美術館の存在理由になるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災後における、文化芸術が果たした役割、効果について記載しました。 宮城県では、今後も文化芸術振興施策の最優先課題として、心の復興を位置付けていること、また、宮城県美術館の役割の大きさについて記載しました。
5	3 宮城県美術館の強み (1)良好な立地条件と合理性のある建築設計	P 9	<ul style="list-style-type: none"> 広瀬川河畔にあり、良い環境であることと躯体が名建築であることに触れるべき。 	<ul style="list-style-type: none"> 強みとして、教育学術、文化・交流機関が集積する本県有数の文教区域にあること、「杜の都仙台」を象徴するすばらしい自然環境に恵まれていることを加筆しました。
6	第2章 これからの宮城県美術館が目指す方向性 1 宮城県美術館が果たすべき役割	P 17	<ul style="list-style-type: none"> 宮城県美術館が世界の中でどういう位置付けなのか、東北、宮城と位置付けした上で、どういう活動をするべきかを明らかにする。 「東北、宮城の作家が描いた絵画作品などアートの力で、宮城という土地の力や資源をどう可視化し、世界に発信するか、それを美術館がやっていく」となれば「なるほど、東北の作品を世界に位置付け、県民のシビックプライドをつくっていく美術館になるのだな」と分かる。 県立美術館では、グローバリズムとローカリズムをどう結びつけるかが難しいところ。ローカリズムがグローバリズムに直結することが良いが、コンセプトをつくるときには、どの立場でつくるか考えておくことが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 美術館の果たすべき役割を、東北及び宮城県における位置付けや世界との関係について、所蔵品、教育普及等の観点から記載しました。
7	3 リニューアルに向けた基本的な考え方 (1)持てる財産・資源を最大限に有効活用	P 19	<ul style="list-style-type: none"> 広瀬川の河畔で非常に特異な場所かつ価値のある場所であることを活かさないこの美術館はやっていけないことを明らかにする。 今ある資源を組み合わせる最大限の効果を出すために、今までの常識にとらわれずに画期的な方法でやっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 文教区域内での他の施設との連携、自然環境の活用による機能強化について記載しました。
8	4 リニューアルのコンセプト (1)子どもたちに豊かな体験を提供する美術館	P 20	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な事業性1個、1個を丁寧にイメージして構想を練っていかなければならない。例えば、子どものプログラムの何が今度の構想の中で見えてくるかという一文がほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「キッズ・ラボ（仮称）」の基本的スタンスと機能について記載しました。

9	(4)ともに築きあう美術館	P 21	<ul style="list-style-type: none"> ・時間をかけて、自分たちがそれに参加し、作りながら、みんなで作る美術館が大切。つくるという意味を一緒に勉強しないと意味のないものになってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「開かれた美術館」の使命として、ボランティア人材の育成と活用について記載しました。
10	第4章 本構想の実現に向けて 1 施設整備の手法について	P 29 ①	<ul style="list-style-type: none"> ・第4章が具体的に見える方が良い。 ・どうリノベーション、リニューアルしていくのかという戦略を明確にするために、「こういう戦略をもってやる」という形にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手法の表現を整理し、現地改修を基本とする根拠を示しました。
11	2 事業手法等について	P 29 ②	<ul style="list-style-type: none"> ・公民連携で何がいいかという、公は管理面(資金、県民との連携、つながり)をしっかりと、民は専門性を持っているので、自分の人生と企業理念とともにがっちり運営していくことができる。 ・活かした資源をしっかりと把握するための調査もしっかりやっていくべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業手法及び資金調達について、民間のノウハウや資金の活用の観点から記載しました。
12	3 スタッフの充実について	P 30	<ul style="list-style-type: none"> ・構想を実現するには、しっかりとした人をちゃんとしたところに入れることによって動くものと考えた方が良い。 ・どういう人たちがここでチームを組んで仕事をしていくのかということフレームに入れることによって、専門職員の雇用が容易になったり、地域のNPOや学校と連携しやすくなる。 ・職員数としても少し多く欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・組織運営スタッフの充実について、学芸員の資質能力向上、専門スタッフ配置、外部人材等との連携の観点から記載しました。
13	4 本構想策定後のプロセス	P 31	<ul style="list-style-type: none"> ・リノベーション、リニューアルは拘束条件が非常に多い。本体を診断することなしにリノベーションはできない。建築基準法の遡及効果やどこまで直すなど現在の環境の中で何が可能かちゃんと考えるべき。 ・この敷地の条件の中の美術館が今どういうポテンシャル、可能性を持っていて、どれが限界なのかという調査をしたものが見えてこない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の調査の進め方、基本方針策定に向けた流れについて記載しました。
14	「おわりに」	P 32	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいイメージのものを示すキャッチコピーがあった方が良い。 ・構想をぱっと見た瞬間に、「こういう新しい形になるんだ」ということがみんなが分かるような構想になると良い。 ・目新しさと明快に分かるようなワンポイントがほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「おわりに」に、リニューアルに向けて目指すべき姿を3つの目標として記載しました。

	○その他の意見		<ul style="list-style-type: none"> 基本構想策定後の基本方針策定の検討の過程において、より具体的な方向性として示していきます。
15	コレクション		<ul style="list-style-type: none"> ロシア人やユーロ圏の人が来るというくらいのもを集めなくてはいけない。 果たして今持っているコレクションがいいのかという議論も含めて、どういコレクションの指針を美術館の中で大事にすべきか、今まである部分をどう考えるべきかという議論が必要。 どうしたら、収蔵品をすばらしいコレクションだと県民みんなが共感を持てるか考え、「このコレクションがある限り、そういうことに一生懸命やっていく」という気概をだせば「じゃあ教育プログラムを充実させよう」となり、教育プログラムを開発していこうとか、インバウンドにも資する何かができるとつながる。
16	図書資料の開放		<ul style="list-style-type: none"> 書庫の資料を一般に開放すべき。